



平成十六年六月三十日発行
編集 社寺建造物美術協議会
発行人 小西 陳雄
〒321-1431 栃木県日光市山内二二六五
(株)小西美術工藝社 内
TEL (0288) 5411-198
FAX (0288) 5411-196

「歴史的建造物の保存に、 今なにが必要か」

財団法人 文化財建造物保存技術協会
企画室長 近 藤 光 雄

このところ、我国の森林についての議論が盛んである。シンポジウムやセミナー等

がある。

があちらこちらで開催されているし、それに関する記事を、新聞、雑誌、テレビ等々でよく耳にし、目にもする。それは

外国産木材に圧され、国産材が売れなくなっていることが根本的な原因のようである。

伐採しても採算がとれない間伐採、価値を失った山での労働、都市文明への知識の偏向。

つまり今、日本の森は放置される危機にあるという。檜と杉の単一木を一斉に植林し、四十年で一斉に伐採する、経

済市場原理に基づく山づくりのつげが今問われているのである。

造であり、それらは風雨にさらされ、また地震、台風等の災害や虫害の被害を受ける宿命を持っている。従って、歴史的建造物を長く維持保存していくためには、どうしても必要な時期における、適正な修理が欠かせないのである。

だから我々修理技術者の存在もまた必要とされている。

ところで、我々は文化財修理における基本的な理念を持っている。それは、建造物の形、用いられている材料、工法、そして環境をオリジナルと違つたものに変えないことである。この四つの要素のうち、特に、形と環境については、現状変更という厳しい手

続きを経なければならぬが、その他についても監視の目を厳しく、これらは厳格に守られていくといつて良い。

明治三十年発布の「古社寺

保存法」以来、これまで永々と保存修理が続けられてきた。古代、中世の社寺建築に始まり、近世、明治建築と移つてきたが、古建築に使われていた木材をみると、鎌倉時代までは檜が圧倒的に多く、その後には文化財建造物の対象の拡大とともに、工具の発達と相まって、地産地消が顕著となった。その土地の良質な資材が使われるようになったのである。樺づくり、ヒバづくり、

七年の第二室戸台風で被害を受けた建物の屋根の修理が現に待たされているのである。このことのシンポジウムや危機を訴えた記事もよく見かける。また、大径材についても、品質の低下、納期の遅れ、乾燥の問題等。特に、松の大径材については危機的状況にある。入手が困難なため、しかたなく他の材種に、あるいは外国産に変更したりする例があつた。修理の基本理念を脅かすまでにきていると言えよう。檜皮や大径材等の資材は不足していると言つてもいいかも知れない。

他の資材はどうであらうか。国産漆は価格の面から外国産に淘汰され青息吐息であることは広く知られている。茅は地元の良く管理された茅場から供給されることがなくなり、品質が大きな問題となつている。こうしてひとつひとつの資材の現状を精査すると、すべての資材が供給不足として統括することはできないようだ。むしろ、資材それぞれに固有の課題をかかえていると整理したほうがいいかも知れない。しかし、さらにじっくり追求すると、共通したものが見え

てくる。結論を急ぐため詳しい説明は避け、課題を整理してみよう。

- 一、資材の品質が近年著しく劣化していること。
- 二、修理工資材の生産、流通に関する情報が滞っていること。
- 三、施工に要するコストが高くなってきたこと。
- 四、生産、施工に競争原理が働かず、技術の低下が見られること。

共通点はこの四つにまとめられることができる。さらに課題を探っていくと、行き場を失った文化財に収斂するしかない伝統技術の姿が見えてくるのである。



京都の国有林・森林ボランティア活動の様子

競争があり、技術を怠ることはできなかつたのである。

このことから茅を取り巻く課題解決の鍵がボランティアや地域共同体が参加する、地域社会のシステムの再構築にあるのではないかと気づく。もちろんそれは、伝統文化が重んじられる共同体であらねばならない。人々は歴史を軽視したことで



大内宿の茅場・地域住民参加活動の様子

限りなく傲慢になった四十年代以降の自分を知っているはずであるから。他の資材もそれぞれ解決の道はあるだろう。それは多分どれだけ裾野を広げられるかにかかっているように思う。

我国の国土は世界では群を抜く森林率である。先進国では特異な存在だという。日本人のアイデンティティの一つは、何万年も育まれてきた森にあるに違いない。それにもかかわらず、植物性資材とそれを採取、加工、施工する伝統技術に危機がある。このことは昭和五十年頃からずっと議論されてきたが、今、漸く森と、木の文化を代表する文

化財建造物との関係が関連して語られはじめている。現代の人類における最大の課題は、いかに持続可能な社会をつくっていくかにあると言われている。日本の森と文化財のもつ課題がそれぞれ解決された時は、歴史と文化に価値を見出し、そして環境保全に優れた、資源循環型社会システムの先駆的モデルが構築されたことになるのではないかと思うのだが。

(原文のまま)

「独り言」

（南鈴木鋳金具工芸社 鈴木正男）

物の大切さ、常識の無さが薄らいでいる昨今、誰が教えてくれるのでしょうか。

ふと考えてみれば、神仏に關しても家にある仏壇に手を合せる子供達、大人達が少なくなっていると思う。近頃は親との同居も少なくなり、ましてや三世同居など皆無に等しい状況であります。先祖が作りあげ、守ってきた日本の伝統・良き風習等が伝わるうはずがありません。今は大人さえ自信を持って、生きて

いない。子供達に伝える何物も持っていないとさえ言えると思います。私共は昨年より、市の事業の一環として行なわれている、中学生を対象にした「体験学習」を指導しています。鋳金具に關してですが、子供をはじめ、大人までもがパソコンで図面を作製し、機械で彫っていると思っっているようです。時代の流れとして、手作りの物が目に見えて減っている中で、当然の成り行き、又、思考として仕方がないのかもしれないませんが、その中であって機械では作り得ない物、手作りだからこそ作れる貴重なものがある事を、この体験を通じて、知ってもらいたいと思います。又、自分で自分の力で一つのものを作り上げてゆく喜びも、感じてほしいと思っております。微力ではあるが何か伝わる事が一つでもあればと考えています。

た地元の老人である。屋根屋にも正確な樹種が答えられないものもあるが、聞き取ったのはサルスベリ・クリ・ヒメジャラシ・コブシ・ネソ（マンサク）・オオガ・ヤマウルシなどで、サクラのように樹皮の厚いのは虫に食われやすいので、使用しない。垂木にはサルスベリが多く使用され、これにコブシやクリなどが混じる。太さは元で六センチメートル程度、長さは二〜三メートルで枝のない素直な木が選ばれる。押鉾も同様であるが、垂木より細いものを使用する。

粗朶(そだ)

財団法人 文化財建造物保存技術協会
元東京支部長 日塔和彦

近年の文化財保護のキーワードとして活用という言葉が広く用いられている。さらに最近では景観という言葉がキーワードになっている。それは昨年九月号の『月刊文化財』の特集「農林水産業に關連する文化的景観の保護に關する調査研究(報告)」によく現れている。その他、里山や社叢なども最近耳にすることが多い。活用は別にして、これら農村景観・里山・社叢などの言葉は私たちの年代にとって懐かしい響きのあるものとなっている。

農村景観は昭和四十年代以降大きく変容した。その変化は都市周辺から次第に地方に浸透して約三十年を費やし、ついに山間地までに及んでいる。その主なる原因が農水省による大規模な圃場整備事業で、丘や山を削り、河川の流路を変え、多くの雑木林や社叢なども切り倒した。河岸段

丘や棚田なども平坦な水田に作り直された。慣れ親しんだ幼い頃の地形や農村風景が消失してしまつたのである。

里山とは簡単に言えば農村部の人間が生活していくうえで必要な営みの場である。人の住む里には田圃があり、屋敷林に囲まれた茅葺きの家屋敷がある。村外れには神社の森、社叢が村人の精神的な支えとして存在する。

里に近い山麓にはコナラ・クヌギ・シイなどの雑木林や草地が広がる。その上の方、峰に近い高所には茅場が広がっている。これら多くは共有地で、雑木林では春にワラビ・ゼンマイなどの山菜採り、秋には落ち葉を集めて肥料としたが、キノコなども多く採れた。また、枯木を拾っては焚き木として用いたりした。草地からは牛・馬の飼料や畑などに敷き込む肥料として草が刈り取られた。茅場から刈

り取られたススキは農家の屋根の葺材として使用され、刈り取った跡は火を入れて野焼きを行なつた。

ここで注目したいのは雑木林から刈り取られる粗朶木である。粗朶とは「広辞苑」によると「刈り取つた樹の枝。薪とし、また、堤を築く材料や海苔を着生させる材料とする」とある。この説明は簡単

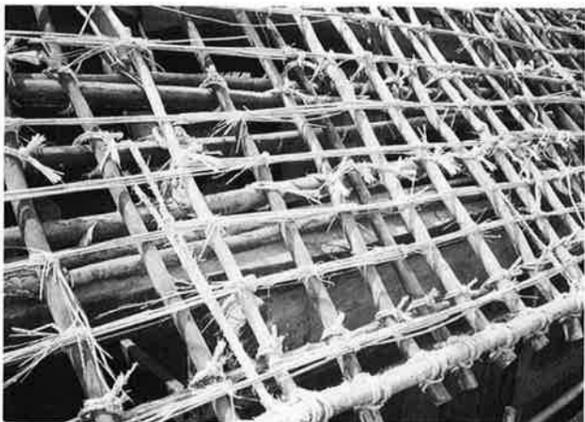
すぎてわかりにくい。雑木の枝を切り取り、土木工事や建築工事などに利用することである。雑木の樹種は地方によって相違があるが、関東地方ではナラ・クヌギなどの落葉樹が多くみられる。ここでは粗朶を取るために主幹を根本近くで伐採し、根の周辺から伸びてくる細くて、長い枝を育てていたことを記憶している。また、粗朶山として粗朶をとるための林を特別に持つていたところもある。

土木工事では粗朶沈床が代表的な使用法で、護岸工事などにおいて杭を粗朶で籠状に編み付け、これを水中に沈めて土堤が崩れるのを防ぐ工法である。この粗朶沈床は多種多様な水生生物が棲息するピオトープ(野生生物の生育場

所)になることから、再び注目を集めて新潟県などでは実際に築造されている。

建築工事では茅葺き屋根の屋中などの結束材や垂木、小舞木、押鉾木に使われるほか、土壁の小舞下地としても使用される。文化財工事でも茅葺き屋根の仕様に垂木や押鉾として粗朶のことが生き残っているのをご存知であろう。

この粗朶の使用は関東地方や南の方にはみられず、主として竹の少なかった裏日本や東北地方にみられる。たとえば、最近屋根の葺き替えが行なわれた福島県猪苗代町の重要文化財旧馬場家住宅(旧所在地は南会津郡伊南村)では粗朶が多く使用されていた。垂木や押鉾だけでなく、又首と屋中の結束、隅部など要所の締め付け用縄としても用いられていた。葺き替えに当たっては多くの補足材が必要になったが、これらはもとの里山から刈り取ってきた。採取するのは以前から粗朶を調達してい



旧馬場家住宅の粗朶を用いて屋根下地

屋中などの結束にはネソが使われる。ネソは結束に使用される粗朶の総称でそれは「ネソひねり」が出来るものでなければならぬ。ネソひねりとは元のほうを捻って柔らかくすることで、サルスベリなどはひねることが出来ない。ネソとして多く使用されるのはマンサクで、その他にも材種不明の青色の枝が使用された。アケビ蔓なども使用されるが、これは捻る必要がないのでネソとは呼ばない。

このように、会津地方の民家には多くの粗朶が使用されている。現在の壁小舞は割竹になっていたが、当初は粗朶が使用されていた可能性が強い。

また、千葉県八日市場市の県指定史跡飯高寺境内の斜面崩落防止としてシガラ土留工が採用された。これは粗朶沈床と同じく、木(松)杭に編み込んで土留めを施すものであるが、材料としては丸竹を用いていた。これも本来は粗朶を用いたものであろうが、今日では入手が困難なことから竹を代用したと見られる。編まれた竹は次第に腐れて土に戻ってしまうが、その間に

草木や樹木の根が生えて法面は補強されている。このように、忘れ去られていた粗朶の利用法が地球環境問題などから再評価を受けて、復活しようとしている。里山

としての粗朶山もいつかは生き返り、再び農村景観だけでなく、地球に負荷をかけない先人の知恵も同時に見直される日を待ちたい。(原文のまま)

第十五回 研修会及び通常総会開催 (静岡県富士宮市にて)

平成十六年三月十二日に第十五回研修会含む通常総会に当り、静岡県富士宮市宮町の富士山本宮浅間大社に集合しました。午後一時から富士山本宮浅間大社拝殿に於きまして正式参拝をいたしました。渡邊宮司様よりご挨拶を頂きました。その後、同社参集所に移り、財団法人文化財建造物保存技術協会・関口欣也理事長様の講演を伺いました。

はじめご担当の中村権宮司様はじめ幸田榎宜様、宮崎権榎宜様ご出席を頂きまして傍聴して頂きました。関口先生には前々回の「すいかずら」の冒頭の記事にミケネの建築に

「この『鋳の響』は平成月十四年四月から産経新聞・西日本版「美とくらし」欄に月二回掲載されたものを同氏の許可(並びに、産経新聞、支局長の承諾)を受けて転載したものです。注―森本安之助氏は、鋳金具の技術で、国の「選定保存技術保持者認定」を受けておられ、今も現役で活躍されておられる斯界の第一人者で、当協議会の副会長をしておられます。



関口理事長様ご講演



松皮葺き屋根修理の見学研修

ついて大変面白い観点からの見方の記事を頂きました。今回はその集大成と言うべきものでございました。今回、文建協の関口理事長様がわざわざ協議会の総会にお出で頂きましたのは、重要文化財浅間大社設計管理事務所の方からのサポートがあったという事でございまして、大変有難い事でございます。厚く御礼申し上げます。

この後に、重要文化財浅間大社の御本殿および他の社殿等の工事現場の見学研修を致しました。

松皮葺きのお屋根の修理をしているところでございます。兵庫の村上社寺さんが元請けでございます。現場の状況等をつぶさに拝見致しました。

その他、社殿の内部・外部の塗装鋳金具そういったところの各所の見学もさせて頂きました。これに付きましては重要文化財浅間大社の設計管理事務所の高木所長さんに詳細にご案内を頂き見学研修を

お願い致しました。有難うございました。

以上で今日の日程を終了し、宿舎の富士宮グリーンホテルへ投宿を致しました。懇親の夕食会には事務局から小西美術工芸社の原事務局長ほか事務局三名程出席を致しまして、にぎやかに取り行いました。

翌日、三月十三日でございますが、同ホテル内の会議室に於きまして全文連の後藤事務局長さんから講演を頂きました。演題は「日本建築の歴史について」でございます。今回は京都府の文化財レポーターの中から国宝・大徳寺の唐

門と重要文化財・大徳寺の勅使門、これが近年に修理が完了致しました。桃山時代を代表する建築で、唐門については聚楽第の遺構という言い伝えが有り、勅使門も慶長の大裏御門を下賜されたものとされて大徳寺に伝わる秘宝の建物でございます。これについては修理を担当された京都府の森田拓朗(文化財保護課)先生の原稿を拝見致しました。鋳の鋳、それから彩色の復元、摺り漆、門の扉、松皮葺き屋根、終わりに聚楽第、それぞれのテーマで詳細に修理の過程を説明されております。添付の写真も竣工写真ですが、見せて頂きました。大変立派な復元がなされたと感じた次第です。

講演が終わりましてから、第十五回通常総会に入りまして会則によりまして小西会長が議長を務めました。予定議案・第一号議案平成十五年度事業報告並びに収支状況報告を事務局から報告致しご承認頂きました。第二号議案平成十六年度事業計画案並びに予算案についてもご説明致しまして、ご承認頂きました。第三号議案として平成十六年度

の当協議会の活動についての提案でございますが、今週の始めからご当地で行われました第一回の技術研修会についての事業がありました。十六年度は金工部会の方にお願ひ致しまして何か活動をしたという事を提案致しまして、了承を頂きました。第四号議案・(イ)芸術文化振興基金による技術研修会(これは第二回になります)平成十七年度に予定したいと思っております。この申請は今年の秋に行いますという事でご了解を頂きました。

候補者の適当な方があれば推薦をして頂きたいと思っております。その他、今週火曜日から金曜日まで行われました、第一回技術研修会、これは芸術文化振興基金による研修会でございますが、これにつきましても報告書作成の予算を取ってございますので、作成が出来次第に皆様の方へご送付をし、文化庁・文技協会・その

『鋳の響』

かざり

こえ

(株)森本鋳金具製作所

森本安之助

他関係機関へもお送りする予定でございます。次回第十六回研修会および通常総会の予定でございますが、平成十六年度中に企画をしたいと云う事でございますので、これはいづれ金工部会の大谷さん、森本さんとご相談を致しまして第二回の技術

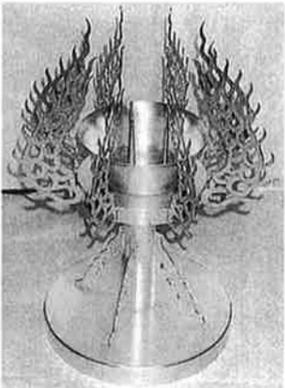
この『鋳の響』は平成月十四年四月から産経新聞・西日本版「美とくらし」欄に月二回掲載されたものを同氏の許可(並びに、産経新聞、支局長の承諾)を受けて転載したものです。注―森本安之助氏は、鋳金具の技術で、国の「選定保存技術保持者認定」を受けておられ、今も現役で活躍されておられる斯界の第一人者で、当協議会の副会長をしておられます。

心のもし灯

五月満月の夜に、京都・鞍馬山で光と聖音の祭典「五月

満月祭」が行われた。その宵には天界と地上の間に通路が開かれ、ひととき強いエネルギーがふり注ぐといわれ、清水を捧げ、心のもしびを輝かせ、神秘な力を身に受けて、ひとり一人の魂の「めざめ」のために熱い祈りが捧げられる。

この儀式は、ヒマラヤ山中やインドで五月満月の夜に行われているウエサク祭と相通ずるものといわれている。鞍馬寺の管長様から、儀式に使う「お力の宝棒」をより強力なものに造り変えたいとのご相談を受けた。木製で金箔押しのものであったから、



“心のもし灯”

金属の方がよりよいものになるので、真鍮材を使い、金鍍金仕上げで新調した。次に清水を満たす銀碗を造らせていただいた。清らかさと、荘厳さを一層高め、より神秘さを深める意図で銀を用い、波の文様の透彫りを碗の上部に配し、さらにその上に水晶の玉を安置した。そして今年、人みなに備わった浄らかな魂の象徴である「心のもし灯」を謹製させていただいた。

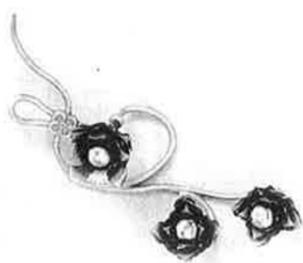
祈りを捧げる人々の、清く熱いめざめを導くロウソクを立てる燭台Ⅱ写真Ⅱである。大変な、しかも重い仕事だったが、八條の火災を燃やし、清く力強く、また勢いよく聖火が天を衝いて上がるさまを表せたと思う。祈りを捧げる皆さまの心を心として、誠心誠意作品に成し終えたいま、感謝の気持ちに満たされている。

懸装品しのご迫力

六月も半ばを過ぎると、京都人は日本三大祭のひとつである「祇園祭」に心がはずむ。七月の一カ月間続く神事の中でも、十七日の山鉾巡行は「動く美術館」といわれ、ゴブラン織りの見送りや水引、胴掛けなどの懸装品が話題になるが、趣向を凝らした銚金具も多彩に使われている。昭和の初め、高松宮御成婚を祝って、放下鉾では、破風極木廻りの銚金具を新調してなお一層華麗なものにと、父・二代目安之助に注文された。

破風坪み尻金具は、宝相華唐草文様高肉彫の上透彫り。散らし金具は、唐花をあしらった鳳凰の高肉彫、神紋と唐花の一部(写真)にはプラチナを使ってより高尚さを高め極木金具は唐花宝相華唐草文様の地彫りと透彫りを併用、調和を保っている。

長刀鉾では、天井に星座、四本柱は松、欄縁に十二支。極木には、テッセン、菱、キキョウを。月鉾では、貝類や海藻……。これらはほんの一例に過ぎないが、意匠的に見てもさまざま動物、植物、天象が使われ、それを表現する技術は懸装品しのご迫力を感じさせる。

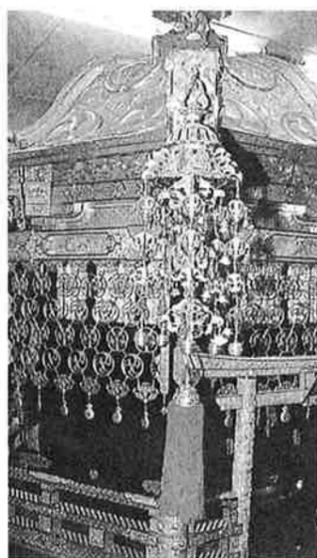


「懸装品しのご迫力」

とひとつ一つが小さく、そばで見なければその手法や素晴らしいさを知ることはできない。興味をお持ちの方は、鉾立てが終わると、十六日の宵山まで鉾に上ることができるので、ぜひ間近で世界に誇れる日本の伝統と心、技術をつぶさに確かめていただけたらと思う。

先人のすばらしい技

祇園祭の鉾立ても間近、十日夕方には鴨川の四条河原で、神事の一つ「神輿洗い」が厳かに行われる。祇園祭は京都・八坂神社の



「先人のすばらしい技」

祭礼。京都人が「祇園さん」と親しみをこめて呼ぶ八坂神社では、今春、本殿の平成の大修理が完工した。これに合せ、傷みがひどかった三基の御神輿の修復も計画され、三年の歳月をかけて徹底的に修理し、精魂こめて化粧直しをさせていただいた。京都の神輿は、神殿造りと称されるものが多いが、祇園さんのは四角、六角、八角と異なっており、屋根は唐草文の打出彫りに、きゅうり木瓜の神紋の重ね打ちを配し、屋根の上には、二基は鳳凰、一基は菊花がのっている。屋根裏は雲文の打出彫りで、見付は鶴など鳥類を重ね、桁鼻には十二支などの動物を、わらび手は菊、松などの草花を意匠した高肉彫りの精緻な銚がはめられている。鳥居は牡丹文地彫りの総包みと雲文、青海波文の繊細な透彫りに高肉彫りの竜。高欄

は七宝文の透彫りに唐草文の地彫りといったように、それぞれに工夫が凝らされ、台輪は蹴彫りの剣巴文で統一、環塔(垂れ飾り)類は、神紋を透彫りにして使われている。御神輿のお披露目は十日から十七日までと、二十四日から二十八日までの期間、修復なった祇園さんの押殿で華やかに行われると承っているが、先人の手づくりの技のすばらしさと、人間の可能性のかけり知れなき、都人の奥深さを学び、よりよい京都の糧にしたいと思っている。

人類の宝を末永く

祇園祭りの圧巻である山鉾の巡行が都大路に繰り広げられた十七日、夜は御神輿が威勢よく氏子の町々を練った。

御神輿は二十四日まで四条通りのお旅所に安置され、人々のお参りを受けたあと、還幸祭が行われ、西の地区を回って、八坂神社にお帰りになり、二十八日の神輿洗いまで拝殿に据え置かれる。一方、巡行を終えた山鉾はさっそく解体されて、それぞれの蔵に収納される。まず、おびただしい飾り房、組紐、懸装品類がはずされ、屋根をはじめとする化粧材を取り外す。そして、構造材である骨組みをほぐくと解体は終了する……。こう記すと、至極簡単なことのようにだが、化粧材には漆塗りや金箔彩色が施された銚金具も取り付けられており、作業は慎重が期される。しかし、大変なのは実はこれから。かりにも世界の人たちが感嘆するさまざまな工芸の粋が詰め込まれた人類の宝ものだ。いつまでも限りなく、大事に伝える責任がある。狭い通りを進む時、屋根が電柱に触れることもあれば、車止めを入れるショックで銚金具がはずれることもある。繊維製品では擦れると糸が切れるアクシデントも起きる。

写真は、叡天神山の房掛金具を修理した時のもので、銚金をためず完全に元通りに修復した。管理している町衆は、それこそ命がけの気持ちでことにあたられており、「御苦勞様」と頭が下がる。この裏方さんの努力があってこそ、祭が成り立っていることを忘れてはならない。(原文のまま) (この項、次号に続く)



「人類の宝を末永く」

栃木の「うるし」山

からの通信

〔前号から続く〕

榊小西美術工芸社 小西 陳雄

《漆の流通の難しさ》

岩手の漆掻きの本職の御一行がウチの漆山にやってこられて慎重な対応が出来ずじまつた。と言うのは「会社と

して当然のことと考えていたのだが」採れ高の清算方法で生漆を引き取る経緯の話をしたので、浄法寺生漆生産出荷組合の岩館理事長から後日、ボヤかれる事になる。人の悪口は余り言わない方がいいのだが、この時ばかりは困惑顔で話をされた。「小西さんの山から帰って、組合のやり方に自己批判がでましてネ、困っておるんです、ハイ」向こうは生産者から卸売、又は小売が普通だが、当社は生産者が、そのまま使っちゃったり、或いは加工に廻しているんだからつまり穴ぼこがある立場と無い立場に分れちゃつてるワケ。世の中って難しいもんだ、まったくネ。つまり、ウチは流通の邪魔をした訳ですよ、ハイ。京都での(財)全国国宝重要文化財所有者連盟、主催の団体連絡協議会へ元氣に出て来た岩館組合長「小西さん、山の漆が余ってますから買って下さいよ」と、寄ってこられて私は返事につまりましたよ。山出しの漉し上げ漆にしたって、ワンランク上の値段だし、ウチが、又は他の協議会員が、転手古舞をするほどの単価の良い大工事が、出れば買

《「うるし山」の見学会》

ウチの「うるし山」の宣伝に努めたこともありすが、文化財修理の現場の所長さん方、又は神社仏閣の営繕担当の御方面より「二度、その「うるし山」を見せろ。漆をどうやって採るのか、うるし掻きの実演を見たい」と申される方々が増えて、どうやら関東で、その出来る処はおたくの「うるし山」位かと言う話で、面映ゆい事乍ら、諸先生方をご案内する催しを内輪に執り行うことになった。J.R宇都宮駅前集合で、バス二台に分乗して頂き、現地案内となる(各自、自動車御来駕の向きは略地図を差し上げて現地へ行って頂いた)。折しも時候は盛夏(注1)の季節。社員の主だった者が、現地への案内・受付・その他で忙殺され、現場での解説・実演等は、例の秋田さん夫妻が出られ勤めて頂いた。漆の樹から採る透明に近い粘性のある液体、掻取りの実況、その

場でトヨツケ(注2)をして刻酸化し乾燥へ向う漆液の変化。それぞれの方が感心し納得して頂いた。こうして採取する生漆、更にこれから精製する朱合漆や黒漆などの御説明も行い、色々勉強して頂けたと思う。

「涙の出た話を少し」

今上天皇の御即位の御大典を慶祝申し上げる皇室行事が皇居で催行される運びとなり高御座(たかみくら)と御帳台(みちようだい)の漆塗り・極彩色の御修理の命がおりた。一世一代のまことに名誉な仕事である。この漆塗りにウチの「うるし山」の漆を使わせて頂いた。日本産の漆で御修理する事が出来て(勿論、岩手・浄法産の漆が主体だったが)嬉しい限りだった。伊勢神宮第六十一回御遷宮の御神宝(御衣笠・御櫛篋その他の御篋)にも「うるし山」の漆は活躍した。完成した美術工芸の粋を見

(注1)盛夏……盛夏の暑い時期に採る生漆。上辺とも称する。ウルシオールが多い強度のある漆で、価値がある。(注2)トヨツケ……採取した生漆をガラス板に篋付けして、乾燥が進む度合や状態を見る作業。(この項、次号に続く)

て、じいんと来て涙した訳。心情的には右翼だ、と思っっているが、その前に日本の美術工芸や、文化遺産を護る職人としてじいんと来るんだよ。天皇の即位に逆らつて、卑劣にも手製の爆弾を京都御所に打ち込んだり、伝統的な有職工芸の職人の店舗を狙ったりする人達が居たが、日本国で生まれた人だろが本場の日本人ではないと私は思う。人間の自由とか尊厳とかはその時代によって変わっていると、抵抗するならもつと別の手段や方法があったのではと思つた事柄だ。

材料店紹介

鎌倉彫素地 挽物木工品
漆塗り加工 製造販売

(株)大石製作所

(神奈川・鎌倉)

今回は、大正十二年創業の大石製作所さんを紹介いたします。

初代熊吉さん、二代目辰之助さんは静岡市の生まれで、三代目辰雄さんは二代目よりロクロ、ルーターマシンを教わり、昭和五十九年、鎌倉市市長より鎌倉彫木地士として優秀技能士賞を受賞。又、平成十五年には(社)日本漆工協会より優秀漆工技術者として表彰されました。

をされる多くの方たちに愛用されているとの事。鎌倉彫等に、興味がおありになる方は一度足を運んでみては如何でしょうか。取り扱っている素地材としましては、お盆、皿、菓子鉢、茶托、硯箱、文庫、手鏡、重箱、お椀、棗(茶道具)、角盆、等々製作されており、ご希望の方には、地方発送も承わっているとの由。

(店舗改築のため写真は掲載)

〔本店〕
〒248-0012 鎌倉市御成町一〇一五
☎(〇四六七)二五―三六四一
FAX(〇四六七)二五―三六四二

〔工場〕
〒248-0007 鎌倉市大町五一〇一五
☎(〇四六七)二二―三七六四

■営業時間 正午〜午後五時
〔定休日〕 日曜・祝日(第二土曜日)

お知らせ

平成十六年度から、京都市の(有)横山金具工房さんが入会されることになりましたので、ご案内致します。

ご主人は選定保存技術認定保存者でございます。

◎編集後記◎

五年前、十年前と比べて世交代替が、ひたひたと波の様に押し寄せて来て、海岸の砂浜に立っている感じがある。明らかに古い力に変わって、新しい力が先行している。所謂、団塊の世代が各界の中核

を占めはじめた。が、私共の業界の新世代はどうだろうか。スムーズに交替が進んでいるか、どうも疑わしい。顧みておのれの処はと忸怩たるものがあるが、もともと、温故知新などと先輩が教えてくれた品の悪い骨董などいじくり廻

したりしていると、何時まで経っても眼が出来ないぞ、と言われたりしていた時代が懐かしい。今、若い人の間で古美術店を歩くのがファッションだと言う話もあるが、願わくば、明治・大正時代の佳品を見分けられる様にして頂き

たい。「やはり、本物を多く見る事だ」とは、名言ですね。

(西)



「社寺建造物美術協議会」名簿

(五十音順)

平成 16 年 6 月

法人名(個人名)	代表者名	住 所	TEL・FAX番号
1 (株)大谷相模掾鑄造所	大谷晴英(大谷秀一)	〒537-0011 大阪府大阪市東成区東今里2-6-20	TEL. 06-6971-6571 FAX. 06-6971-6511
2 (有)川面美術研究所	荒木かおり(川面稜一)	〒616-8242 京都府京都市右京区鳴滝本町69-2	TEL. 075-464-0725 FAX. 075-464-0099
3 岸野美術漆工業(株)	岸野 勲	〒321-1404 栃木県日光市御幸町587-2	TEL. 0288-53-3366 FAX. 0288-54-0072
4 (株)金 寿 堂	黄地耕造	〒527-0122 滋賀県愛知郡湖東町大字長273	TEL. 0749-45-0003 FAX. 0749-45-0505
5 (株)小西美術工藝社	小西暉也	〒108-0074 東京都港区高輪2-21-40 国際高輪ビル7F 〒321-1431 栃木県日光市市内2365	TEL. 03-3447-1481 FAX. 03-3447-0736 TEL. 0288-54-1198 FAX. 0288-54-1196
6 (有)齋藤漆工芸	齋藤敏彦	〒270-1434 千葉県印旛郡白井町大山口1-19-2	TEL. 0474-91-8712 FAX. 0474-91-9046
7 (株)さ か い	酒井 清	〒520-2331 滋賀県野州郡野州町小篠原7-1	TEL. 0775-87-1178 FAX. 0775-87-5355
8 (株)さ わ の 道 玄	澤野道玄	〒604-8232 京都市中京区錦小路通油小路東入る空也町491	TEL. 075-254-3885 FAX. 075-254-3886
9 (有)鈴木鏽金具工芸社	鈴木重信	〒321-1412 栃木県日光市東和町57-1	TEL. 0288-53-1121 FAX. 0288-54-3263
10 (株)青 銅 社	稲見 晃	〒933-0806 富山県高岡市赤祖父94-1	TEL. 0766-25-1139 FAX. 0766-25-5231
11 田 村 漆 工 (有)	田村貫一	〒420-0886 静岡県静岡市大岩4-31-14	TEL. 054-249-0538 FAX. 054-249-0539
12 (株)細川社寺巧藝社	細川夫美子	〒651-2242 神戸市西区井吹台東町1-5-13-301	TEL. 078-997-7178 FAX. 078-997-7179
13 (株)森本鏽金具製作所	森本安之助	〒600-8321 京都市下京区揚梅通西洞院東入八百屋町59	TEL. 075-351-3772 FAX. 075-361-8877
14 (有)横山金具工房	横山義雄	〒601-8394 京都市南区吉祥院中河原里北町14-3	TEL. 075-325-4861 FAX. 075-325-4862